

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720390

研究課題名(和文) 身体と情動の経済：人体の医学的利用に関する経済人類学的研究

研究課題名(英文) The Economy of Body and Affect: Economic Anthropology for the Medical Use of Human Body

研究代表者

山崎 吾郎 (Yamazaki, Goro)

大阪大学・人間科学研究科・招へい研究員

研究者番号：20583991

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：人間の身体という特殊な対象を扱う経済においては、モノの授受に際して情動が強く作用する。この情動の働きは、倫理的課題という形をとって示されることが多いが、同時に特殊な経済関係や社会秩序を作り出す契機ともなっている。本研究では、特に臓器移植、生殖医療、終末期医療に焦点を当てて、やり取りされるモノの特性と行為の特徴を分析し、情動の経済を理解するために必要となる経済人類学の諸概念、および方法論を示した。研究成果は、国内外の学会で発表したほか、また各種論文として出版した。臓器移植については2015年2月に関連する単著を出版した。

研究成果の概要(英文)：The affective aspect of the economy raises various questions not only on ethics but also on sociality that is highly specific to the economy of the human body. This study explored anthropological research on organ transplantation, reproductive medicine, and end-of-life care, and developed theoretical conceptions and frameworks for the affect in economic anthropology. The results of the studies have been presented at international conferences (e.g. IUAES, 4S) and also published as academic papers and the book (in Japanese).

研究分野：文化人類学

キーワード：経済人類学 贈与 身体 情動

1. 研究開始当初の背景

20世紀半ば以降、急速なバイオテクノロジーの発展を背景に、身体を直接的な資源とする経済やその産業化がおこっている。ここでは、身体が喚起する「人間性」や「尊厳」と、経済が体現する効率性や管理との間に埋めがたい溝が生じており、従来とは異なる仕方では経済を捉えるための方法や概念が求められている。しかしながら、バイオテクノロジーの応用が社会に与える影響については、これまで政策、倫理、歴史に関する研究が多くなされてきた一方で、その実践が生み出す効果や帰結に焦点を当てた研究はいまだ少ないのが現状である。たとえば、バイオテクノロジーによって可能になった生命資源の広範な経済化のプロセスを指す「生経済」という概念については、2009年に出版されたOECDによる調査報告書「2030年に向けた生経済」(*The Bioeconomy to 2030*)においてその重要性が指摘され、基本的な概念の定義が試みられている。しかしながら、この概念の使用範囲は極めて広く、また一般的なものとどまっているため、研究者によってその含意が大きく異なっているのが現状である。さらには、生命資源の効率的な生産やその産業化という側面以外に、こうした経済活動そのものが社会秩序や価値観に対して与える影響について、ほとんど言及がなされていないことが重要な課題であると考えられる。本研究では、生命 特 に人間の身体 の経済化という、特殊かつ否応なく社会的な側面を持った広義の経済活動を理解するために、基本的な分析枠組みや概念の検討をすると同時に、現場の多様な実践を踏まえて、生経済の理解に資する基礎的な研究を行う。なかでも、身体がもたらす情動の働きに着目し、「経済合理性」を、広義の社会合理性という考え方に引きつけながら再考することで、新たに生じつつある経済に固有の問題性をとらえることを試みる。

2. 研究の目的

本研究は、人間の身体や生命を直接的な取引の対象とする新たな経済の形態(生経済とよばれる)について、経済人類学の観点から研究を行う。近年、近代社会や市場社会においてみられる互酬性や贈与に関する経済人類学的研究が数多くなされているが、医療経済(とりわけ先端医療の経済)については、そうした研究は端緒についたばかりである。本研究では、経済人類学における広義の経済観念を手掛かりとし、人間の身体(の一部)を扱うがゆえに生起する特殊な経済関係やそれに付随して生じる社会関係を、これまでの研究成果との比較において明らかにする。そのことで、生経済やケアの経済性といった、近年関心が高まっている人体に関わる経済

活動の特徴をとらえるための有効な概念および方法論を検討する。まずは、これまで本研究の代表者(山崎)が行ってきた臓器移植医療に関する研究に基づいて身体の経済化のプロセスにみられる特徴を検討したのち、生殖医療や終末期医療など、関係性の深い他の医療実践との比較を通じて研究を進める。そのことで、身体を経済活動の対象とする際に生じる問題と同時に、経済行為の多様性を明らかにする。また、生経済の理解にとって基本的な概念や理論について、一定の見通しを得ることを目的とする。

3. 研究の方法

科学技術社会論(STS)や文化人類学、医療人類学の領域においてなされてきた先行研究の検討からはじめ、基礎的な文献・資料の収集・分析を行ったのち、人体の取り扱いに関する現在の日本の医療制度、および現場における実践の状況を明らかにする。取り上げるテーマとしては、臓器移植医療、生殖医療、終末期医療の三つに焦点を合わせ、人類学的なフィールドワークの手法によってそれらの実践にみられる経済的行為としての固有性と共通性を明らかにする。臓器移植医療については、研究代表者(山崎)のこれまでの調査研究の成果を、改めて生経済の観点からとらえ直すことから研究を開始する。生殖医療については、文献に基づく研究とし、他の医療実践との比較を行う。そして終末期医療については、以下に記す療養型病院での参与観察調査に基づいて研究を進める。

終末期医療に関する現地調査は、すでにラポールを築いているZ病院(仮称)において行う。Z病院は150床程度の中規模病院であり、院長の許可の下、自由に出入りすることが可能となっている。研究期間中は、患者家族、医療者を中心に、病院内にて継続的に聞き取りや参与観察を行い、収集したデータを分析することで、病院内にみられる広義の経済的行為の特徴を描き出す。特に、治療選択に際しての経済的要因や、生死の境界状態にある人間に対する尊厳やコミュニケーション手段のあり方、またケア実践のあり方を検討し、人間の身体が、情動を介して他者の行為に影響を与える仕方について検討する。そして、そうした人間の情動的側面への理解が、広義の経済関係を考える際に欠かすことのできない論点を形成することを理論的な観点および経験的・実践的な観点の両面から検討し、その有効性を明らかにする。

4. 研究成果

本研究の成果は、国内外の学会において随時発表したほか、各種学術誌に論文として投稿し、出版した。臓器移植医療の実践について

は、2015年2月に、これまでの研究を総括する意味で単著の出版をした。

海外への研究成果の発信として、たとえば2012年度は、ドイツ・ビーレフェルト大学での国際ワークショップ、また中国・南京での国際記号学会において成果報告を行った。ここでは、主に臓器移植医療をとりあげながら、人間の情動が経済理論に対してもつ意味を検討し、贈与論と現代的な情動論の接続を試みたうえで、他の参加者・研究者と議論を行った。

国内外の重要な先行研究の検討については、この分野において先駆的かつ影響力のある研究として知られるニコラス・ローズ『生そのものの政治学：二十一世紀の生物医学、権力、主体性』の翻訳に携わり、2014年に出版した。この作業を通じて、身体を用いた新たな政治経済的体制と管理の問題が、医療研究において重要な論点となることを確認し、本研究と共通する関心について整理した。また、理論的な観点からは、広義の経済モデルを考える上で、人類学における構造主義の再評価や贈与論の再検討が今後の重要な研究の方向性となることを考慮し、関連する論文の邦訳出版をした。

2013年度には、国際人類学・民族学科学連合(IUAES)やSociety for Social Studies of Sciences(4S)の国際大会において研究の進捗を報告し、国内外の研究者との議論を通じて研究を進めた。また、前年度の研究成果を論文としてまとめ、国内外の学術誌において刊行した。同年は、とくに療養型病院での現地調査に進展がみられ、終末期に関わるケア実践や、意識障害患者とのコミュニケーションについて考えるための基礎的な研究データの収集を行うことができた。

最終年となる2014年度は、前年と同様にIUAESや4Sにおいて研究成果の報告をしたほか、単著の出版に向けて準備をすすめ、2015年2月に『臓器移植の人類学』(世界思想社)を刊行した。同書は、これまでの研究の総括的な内容を含んでおり、人間の身体を扱うがゆえに生じる特殊な人間関係や社会性の生成を、民族誌的観点から描きだして論じた。その際に、生経済をとらえるための概念的理解、とくに贈与の再検討については、本研究において行ってきた研究成果の一部が反映されている。

療養型病院での研究に関しては、学会発表や学術論文のかたちで研究成果を出すことができたが、それに加えて、事実や意味の生成プロセスを跡づけるようなプラグマティズムの方法論について検討する必要があることが課題として明らかとなってきた。人間関係のなかに埋め込まれた経済の姿をとらえるうえで、身体を媒介として成り立つコミュニケーションのあり方に目を向けることが不可避である。こうした基礎的な関係性の記述を、病院の内外をとりまく社会経済的状況へと拡張していくなかで、現代の医療実践

のなかで個々の当事者にとって経済的な関心や制約条件がもつ意義を、現場の実践のレベルで明らかにしていく必要がある。さらに、異なる医療実践の間の比較の可能性についても未だ不十分な点が残っているため、継続的に研究を進めていく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7件)

1. 山崎吾郎(2014)「意識障害をめぐる部分的な経験：療養型病院における生の人類学」『思想』第1087号、岩波書店、89-105頁、2014年11月。
2. YAMAZAKI Goro, (2014) Affect and the Economy of Organs, in Gergely Mohácsi (ed.), *Ecologies of Care: Innovations through Technologies, Collectives and the Senses (Readings in Multicultural Innovation Volume 4)*, Osaka: Osaka University Press, pp. 31-41.
3. 山崎吾郎(2013)「技術とともにある身体：技術的介入と制度に埋め込まれた行為」檜垣立哉編『ロボット・身体・テクノロジー』大阪大学出版会、60-77頁、2013年3月。
4. 【翻訳・解説】(2013)「構造主義の生成変化」(エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ著、檜垣立哉、山崎吾郎訳)『思想』第1066号、岩波書店、99-129頁、2013年2月。
5. 【翻訳】(2013)「現れつつある生の形式？」(ニコラス・ローズ著、山崎吾郎訳)『思想』第1066号、岩波書店、303-345頁、2013年2月。
6. 山崎吾郎(2013)「介入と再編：現代医療におけるバロックな身体」『情況 別冊思想理論編第3号』(2013年10・11月合併号) 情況出版、100-114頁、2013年12月。
7. YAMAZAKI Goro, (2013) From cure to governance: the biopolitical scene after the brain death controversy in Japan, *East Asian Science, Technology and Society: An International Journal*, 7(2): 243-259.

〔学会発表〕(計 8件)

1. 山崎吾郎「療養型病院におけるケア実践にみられるリスク認識と意思決定」日本生命倫理学会第26回年次大会、浜松医科

大学、2014年10月25日。

2. YAMAZAKI Goro, Calculating future life: living with the life-sustaining technologies in Japan, *The 39th Annual Meeting of the Society for Social Studies of Science*, Buenos Aires, 2014.8.21.
3. YAMAZAKI Goro, Deleuze and Anthropology: Inquiry into new connectivities, *International Deleuze Studies in Asia Conference*, Osaka JAPAN, 2014.6.7.
4. YAMAZAKI Goro, Living with comatose patients: the process of articulating experiences in a Japanese hospital, *International Union of Anthropology and Ethnological Sciences(IUAES) 2014 conference*, Chiba JAPAN, 2014.5.15.
5. 山崎吾郎「移植臓器にみられる「部分と全体」: パロック身体論の可能性」日本生命倫理学会第25回年次大会、東京大学、2013年11月30日。
6. 山崎吾郎「制度に埋め込まれた行為を考える: 臓器移植の事例から」日本生命倫理学会第24回年次大会、立命館大学、2012年10月27日。
7. YAMAZAKI Goro, Affection and Economic Action: on the Socio-Economic life of organs, *The 11th world congress of the International Association for Semiotic Studies*, Nanjing, China, 2012.10.7.
8. YAMAZAKI Goro, Technological Interventions and Subjectivity: Toward An Anthropology of Robotics for Medicine, *Workshop on Robot Anthropology: Emergent Technologies and Questions of Human Sciences*, Bielefeld University, Germany, 2012.8.3.

〔図書〕(計 3件)

1. 【単著】山崎吾郎(2015)『臓器移植の人類学: 身体の贈与と情動の経済』世界思想社、2015年2月、ISBN:4790716554
2. 【共訳】ニコラス・ローズ(2014)『生そのものの政治学: 二十一世紀の生物医学、権力、主体性』(檜垣立哉監訳、小倉拓也、佐古仁志、山崎吾郎訳)法政大学出版局、2014年10月、ISBN:4588010174

3. 【共著】檜垣立哉編(2013)『ロボット・身体・テクノロジー』大阪大学出版会、2013年3月、ISBN:4872594231

〔産業財産権〕
出願状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等
<http://researchmap.jp/read0152533/>

6. 研究組織

(1)研究代表者 山崎吾郎
()

研究者番号: 20583991

(2)研究分担者 なし
()

研究者番号:

(3)連携研究者 なし
()

研究者番号: